

団体紹介

横山好

natuRable は、立命館大学の正課外団体として、2016 年に発足しました。ミクロネシア連邦ポンペイ州の環境問題に取り組んでいます。当団体の最終目標は「ミクロネシア連邦 (FSM) をはじめとする太平洋島嶼国における廃棄物問題の解決」です。この目標を達成するため、「FSM と日本をつなぐ架け橋となり、地域の環境意識を高める」ことを活動テーマとして掲げ日々、国内外で活動を行っています。当団体の Vision は「人々が環境問題に向き合い、共に解決へ歩む社会」、Mission は「自らが当事者として行動し、人々の環境への関心を高めること」です。国内外で活動を行っており、これまでに 7 回渡航しました。

2025 年度は 8 月 31 日から 9 月 15 日までの 15 日間、10 名で現地を訪問しました。現地で行った活動を抜粋して紹介します。

環境教育

岩田愛生

私たち natuRbale は、ポンペイカトリックスクール、オオミネ小学校、ネッチ小学校の3校において環境教育を実施しました。授業では、まずポイ捨てが環境破壊につながる仕組みを紙芝居形式で伝えました。単なる説明ではなく、途中にクイズを取り入れたことで、生徒たちは積極的に手を挙げ、楽しみながら学ぶ姿が印象的でした。その後、ポンペイ島を描いたイラストを提示し、そこにはポイ捨てやビニール袋の使用といった環境に悪い行動をしている人の姿を描きました。それを見た生徒たちに「このような環境に悪い行動の代わりにどんな行動ができるのか」を考え、付箋にアイデアを書いて地図に貼ってもらいました。完成した地図は教室や図書館に掲示され、子どもたちが日常の中で環境を意識するきっかけになっていると感じています。

また、授業の最後には島の環境保護を促す歌を歌いました。過去に JICA 協力隊の方が作詞されたもので、子供たちは楽しみながら環境を保護する大切さを考えてくれたと思います。



ポンペイカトリックスクールでの写真

さらに、ポンペイカトリックスクールでは環境クラブの生徒との交流も行いました。クラブは発足してまだ1年ほどで、活動も試行錯誤の段階でしたが、輸入品のピザではなく

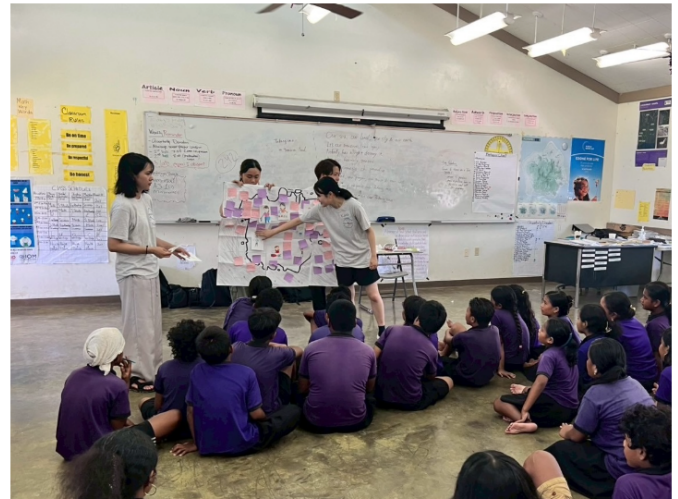
地元の食材を積極的に取り入れ、生徒がそれらの食事をとる機会を増やすなど、島の持続可能性や健康・環境問題に対して自分たちにできることを行おうとされていました。

また、Our Lady of Mercy Catholic High School (OLMCHS) の環境クラブについては、校長先生や担当教員と話す機会をいただきました。そこでは、ペットボトルキャップを使ってドレスを制作する活動や、ごみを拾って作品を作る大会など、廃材を有効活用した創造的な取り組みが行われていました。日本の学校教育ではあまり見られない発想に触れ、環境教育の多様性を実感するとともに、自分自身の視野も広がりました。

一方で、実際に授業を行ってみると数多くの課題にも直面しました。学校ごとに雰囲気や英語力が大きく異なり、後ろの席の子どもたちが集中しづらい場面や、質問がうまく伝わらない場面がありました。そのため、全員が主体的に参加できるようにするには、表情や声量の工夫、個別に声をかける工夫が必要だと痛感しました。これらの経験から、次回以降の活動では学校ごとに異なる英語力を考慮したうえで、誰もが分かりやすい内容の環境教育を行いたいと思います。



オオミネ小学校での写真



ネッチ小学校での写真

今回の渡航を通じて、私は環境教育の難しさと同時に、大きなやりがいを実感しました。子どもたちの表情が少しずつ変わり、最初は消極的だった子が最後には笑顔で付箋を貼ってくれた瞬間には、教育の力を強く感じました。この経験は私にとって大きな財産であり、次回以降の活動では今回の学びを必ず活かしたいと考えています。

訪問

淵上佳奈,横山好

私たちは今回、在ミクロネシア日本国大使館、JICA、Department of Environment Climate Change and Emergency(以下、DECCEM)、Environmental Protection Agency(以下、EPA)、外務省の5つの機関を訪問しました。訪問の主な目的は、現地のリアルな現状や課題について理解を深めること、そして現地のニーズを把握することにあります。また、私たち natuRable のミクロネシアでの活動内容を共有し、今後より効果的に活動していくためのアドバイスをいただくことも主な目的の一つでした。以下では、それぞれの訪問先での主な話題や議論について簡単にまとめていきます。

大使館では、表敬訪問をさせていただき、籠宮大使と二等書記官の富田さんにお会いしました。訪問の間では、私たち natuRable の活動内容を紹介するとともに、ミクロネシア連邦の現状について意見交換を行いました。今回の訪問を通じて、現地における課題や私たちの活動の意義について、外交的な視点から新たな示唆を得ることができました。



JICA では、企画調査員の野中さんからミクロネシアにおける JICA の活動についてお話を伺いました。JICA は主に返済を求めない無償援助を行っており、具体的にはポンペイ港の拡張、道路や橋のメンテナンス、エネルギー発電に関する技術協力など、多岐にわたる支援を展開しています。特に印象的だったのは「メンテナンス」に関するお話でした。ミクロネシアでは、太陽光パネルや重機、道路・橋といった設備が導入されても、費用や技術の不足により十分に維持管理が行えず、本来の使用期間よりも短期間で使えなくなってしまうという課題があるそうです。JICA はこの問題に対して、定期的な点検や技術協力を通じて維持管理を支えています。このお話を伺い、JICA の援助がミクロネシアの持続的なインフラ整備に大きく貢献していることを実感しました。同時に、こうした取り組みが JICA による一方的な支援にとどまるのではなく、将来的には現地の人々自身が維持管理を担えるようになることが重要だと感じました。



DECEM では、同機関主催のワークショップに参加し、さまざまな環境団体の方々と意見交換を行いました。ワークショップでは、プラスチックごみを回収して置物を製作している NPO 団体などによるプレゼンテーションが行われ、現地で取り組まれている活動の具体的な様子を知ることができました。また、私たち natuRable にも活動紹介の時間をいただき、現地の方々から評価とともに改善点についての的確なアドバイスをいただきました。今後の活動を見直すうえで、大変貴重な機会となりました。さらに、参加者全員でゴミ捨てされたごみを拾い、それぞれのごみがどの分類にリサイクルされるのかを確認しました。この体験を通じて、リサイクルの重要性を改めて実感するとともに、現地の人々が日常的に直面している課題を身近に感じることができました。今回のワークショップには、環境問題に真剣に向き合う多くの人々が集まり、活発で実りのある意見交換が行われました。

その場の熱意に触れ、自分たちの活動に対する意識も一層高まりました。現地で得られた知見や経験は、今後の取り組みに大いに役立つと感じています。



EPA では、Francisco Celestine さんから、ダンプサイトと廃車問題についてお話を伺いました。現在、ポンペイ州のダンプサイトでは「福岡式」と呼ばれるごみ処理システムが管理者や費用の不足によって、稼働を停止しており、ごみが増え続けている状況にあるそうです。EPA はこの解決に向けて、ごみ中継施設の拡充や福岡式の再開を目指しているとのことでした。また、廃車の問題についても深刻化しており、車の輸入が増える一方で、使われなくなった車が道端に放置されている現状があります。EPA は、廃車を小さく圧縮し、輸入にきた外国船で回収・リサイクルに出す仕組みを確立しようとしています。昨年も渡航したメンバーによれば、交通量はここ 1 年で大幅に増えており、実際に通勤・退勤時間には渋滞が起きるほど車が多く走っていました。それに伴い、廃車も至る所で目にし、この問題の深刻さを強く実感しました。ダンプサイトも廃車も、住民の生活に直結する喫緊の課題であり、その解決に向けた取り組みの重要性を改めて感じました。



外務省では、ローリン・S・ロバート外務大臣と面会しました。はじめに日本文化の紹介を交えながら、当団体の紹介を行い、その後は、外務省や外務大臣ご自身のお話を伺いました。外務省の概要や歴史、日本とのつながりについても詳しく説明していただき、両国の深い関係について理解することができました。

外交面でのお話の中で特に印象的だったのは、さまざまな国から支援を受け入れているミクロネシア連邦が、どのようにそれぞれの国と関係を築いていこうとされているのかについてのお話でした。ミクロネシア連邦は、中国やアメリカから支援を受けているが、どちらの国からの支援も歓迎し、また、それぞれの国との友好的な関係を維持し、国同士のバランスを保とうとしている姿勢が感じられました。多くの国、特に大国から支援を受けているミクロネシアだからこそ、国際社会の中でバランスを取りつつ、平和を大切にしているという強い意識を感じました。

大臣は私たちの話にも親身に耳を傾けてくださり、ミクロネシア連邦が抱える環境問題として海洋汚染を挙げられました。海はミクロネシア連邦の人々にとってだけでなく、ミクロネシア連邦の海を利用する他国にとっても重要な存在であると強調されていたことが印象的でした。さらに、大臣からは、日本とミクロネシア連邦の関係を継続していくことが重要であり、若い世代の交流も必要であるとのお言葉をいただきました。このお話を通

して、日本とミクロネシア連邦のキズナの大切さを改めて実感するとともに、今後も私たちのミクロネシア連邦での活動を誠意を持って続けていきたいと強く感じました。



今回の訪問を通じて、長年続いている課題に加え、昨年とは異なる新たな課題や、深刻化している問題があることを知ることができました。こうした課題は、日本にいただけではなかなか見ることができません。現地で暮らす人々の声を直接伺い、さらに私たち自身も滞在中にその状況を体感したことで、現地の人々が本当に直面している環境課題を理解できたと感じています。訪問した各機関の方々は、そうした課題の解決に真剣に取り組んでおられ、その姿勢から大きな刺激を受けました。私たち自身も、その解決に貢献できる活動をしていきたいという思いを、改めて強くしました。今後も現地の人々や機関と継続的にコミュニケーションを取りながら、来年の渡航ではさらに一歩進んだ活動ができるよう努めていきたいと考えています。

社会調査

横山好

2023年度の渡航以来、私たち natuRable は、ミクロネシア連邦ポンペイ州の住民を対象に、自作した質問票を用いて環境問題に関する社会調査を行ってきました。今年度の社会調査では、現地の人々がデポジットシステムについてどの程度認知しているか、また昨年度に実施したラジオ放送の効果を検証することを目的としました。そのため、デポジットシステムの利用状況やラジオ、環境教育に関する質問を中心に調査を行うとともに、住民の方々がミクロネシア連邦に対して抱く考えや想いについてインタビューを実施しました。

昨年度の社会調査の反省点として、質問数が多く内容が複雑であったことが反省点として挙げられていました。そこで、今年度は、質問内容をより簡潔にし、数も減らすことで回答者の方に負担をかけず、回答しやすい構成にしました。また、昨年度の反省を踏まえ、私たちの先入観が反映されないよう第三者からの確認を行い、さらに「ミクロネシア連邦の好きなところ」など、住民の方々の考え方や価値観に焦点を当てた質問を取り入れることで、現地の人々の視点をより深く理解することを目指しました。



調査の結果、Nett 17 件、Kitti 17 件、Koloniam 18 件、Madolenihm 19 件、Sokehs 17 件、U 18 件の合計 106 件の回答を得ることができました。昨年度は地域によって回答数にばらつきが見られましたが、今年度は均等にデータを集めるよう意識して調査を進めました。インタビューでは、住民の方々の率直な意見や考えを伺うことができ、会話形式で進めることでより自然な交流が生まれました。お話を重ねるうちに関係を深めることができたことも大きな成果の一つです。調査の途中では、「これあげるよ!」といってドーナツなどの食べ物をいただいたり、ポンペイスクートをいただくこともありました。誰に対しても親切で、分かち合おうとするミクロネシア連邦の方々の温かい心に触れ、現地ならではの優しさを感じながら調査を行うことができました。

結果の分析はまだ途中段階ですが、質問票や住民の方々とお話を通してわかったこととして、現地の人々は、缶を回収に出し、お金を受け取る仕組みを「デポジットシステム」とは呼ばず、「Recycling Cans」と表現していることが分かりました。今後は得られたデータを整理し、住民の方々が抱える課題や、現地の方々とともに取り組める方法を明らかにしていきたいと考えています。



文化交流会

横山好

今年度の渡航では、昨年度に引き続き、ミクロネシア連邦短期大学（College of Micronesia-FSM）にて、現地の学生を対象とした日本文化交流会を開催しました。交流会では、けん玉、福笑い、浴衣の着付け、書道といった日本の伝統文化を体験してもらいました。

当日は雨の影響で、当初予定していた場所での開催が難しく、参加者を集めるのにも苦労しましたが、最終的には多くの学生が足を運んでくれ、賑やかで温かい交流の場となりました。



現地の学生の皆さんが、けん玉や福笑いを楽しみながら笑顔になっている姿を見ることができ、とても嬉しく感じました。また、参加してくれた学生の方が、「また来年も待ってるね!」と言ってくれた時はとても嬉しかったです。

渡航を通して、現地の学生との交流は、これからのミクロネシア連邦を支えていく若者とのつながりを築く大切な機会だと感じました。日本とミクロネシアの絆を深めるためにも、今後もこのような文化交流の機会を継続していきたいと考えています。

